

長谷弘記教授送別の辞

常喜 信彦

腎臓学講座（大橋）准教授

腎臓学講座（大橋）長谷弘記教授が平成31年3月を持ちましてご退任を迎えます。東邦大学における、長きにわたる診療、教育、研究への貢献、また大橋旧病院の最後の院長としてのご尽力に対しまして、一言御礼を述べさせていただきます。

長谷弘記先生は1979（昭和54）年3月に東邦大学医学部をご卒業され、直ちに大橋病院循環器内科（旧第3内科）主任教授、関清先生を師事し大学院に入学されます。大学院生として臨床研究を行いながら、2年目に研修ローテーションとして関東労災病院腎臓内科に出向し、故前田貞亮先生に薫陶を受けられます。腎臓診療、透析診療の基礎を学び、この時に得た知識とclinical questionが、その後の先生のライフワークとなる腎臓病と心血管疾患の発展に繋がったと感じております。広田彰男先生の直接指導のもと「内科的浮腫疾患患者の毛細血管内静水圧を推定する」という研究テーマで1983（昭和58）年11月に医学博士号取得（東邦大学甲73号）されました。学位取得後1984（昭和59）年1月から出向した小田原循環器病院出向では、循環器診療と透析診療を同時に行いながら、clinical questionの回答を得るべく精力的な研究活動が始まります。特に透析患者の運動負荷に関する研究は当時世界ではどこでも施行されておらず、世界に先駆けた研究となっております。1985（昭和60）年8月に内科学第三講座助手となり、主任教授の町井 潔先生のご意向により循環器内科から腎臓内科・透析診療に特化することとなり、これが現在の腎臓内科の前身となります。1994（平成6）年1月東邦大学医学部内

科学第三講座医局長、1997（平成9）年6月、東京労災病院循環器内科部長をへて、2006（平成17）年2月、当時の医療センター大橋病院長、甲田英一先生のご尽力により腎臓内科が診療部として独立し、初代の診療部長になられます。2008（平成20）年2月から腎臓内科教授、2015（平成27）年7月から大橋病院院長を3年間お務めになり、病院運営に奔走し、かつ新病院への引っ越し、診療移行という難題も乗り越えられました。その間にまとめられた研究は、心臓・腎臓連関の分野では特筆すべき成果で、多くの国際ガイドラインでも引用されていることを付記させていただきます。

私は1993年より本格的に長谷弘記教授とお仕事をさせて頂きました。診療面では問診、身体所見の重要性の薫陶を受け、臨床診療から常にclinical questionを持つこと、そしてそれを証明するために縦的に研究プランを立て行くことを学びました。当初は長谷教授と2人で国際学会に参加することも多く、行き帰りの機内やホテルで多くのディスカッションをさせて頂いたことは私にとって宝物であります。“分かっていないことだらけだ、まだまだやるべきことが沢山ある”が口癖で、当時まだ若輩であった私を導いて頂きました。これからも高所から私どもに刺激を頂ければと思います。これまでの多くの導きに対しまして深く感謝申し上げますとともに、ますますお元気でご活躍されることを祈念しております。あらためまして、これまでのご教授、ご教示、誠に有難う御座いました。